

第2 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 英語以外の外国語については、『筆記』テストを課し、「リスニング」テストは実施しないが、以下のように可能な限り外国語によるコミュニケーション力を評価する。
 - ・コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解する力を引き続き重視する。
 - ・併せて、高等学校において、「聞くこと」・「読むこと」・「話すこと [やり取り]」、「発表」・「書くこと」を統合した言語活動の充実が図られることを踏まえ、情報や自分の考えを適切に表現したり伝え合ったりするために、理解した情報や考えを整理したり、何をどのように取り上げるかなどを判断したりする力を重視する。
 - ・また、コミュニケーションを支える基盤となる知識や技能についても、引き続き評価する。
- 問題は、高等学校学習指導要領「外国語」の目標及び内容等に対応したものとし、CEFR等を参考に作成する。

また、大学教育を受けるために必要な能力を把握できる問題とするが、高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることも考慮し、多様な入学志願者の学力を適切に識別できるようにする。

2 各問題の出題意図と解答結果及び自己評価等

共通テスト第5回である令和7年度の問題の種類と各設問数、配点の内訳を【表1】に示す。200点満点は令和6年度問題と変わらない。全体の解答数についても、令和6年度問題を踏襲して50とした。

第1問は発音問題であるが、Dに関しては、ピンインによる出題をリスニング問題の代替とする観点に基づき、ピンインによる会話問題を出題している。第2問、第3問は、令和6年度問題と同様である。第4問は、共通テスト第1回から特に充実させた形式で、コミュニケーション能力を読み取り測定する問題である。中間Aでは、大学生の会話、グラフとその解説の文章などから情報を読み取った上で適切な選択肢を選ばせ、コミュニケーションにおける情報の受信力を測定できる問題とした。中間Bでは、地域のイベントを企画する場面で、会話や図表などの多様な資料から必要な情報を読み取り、それらを総合して発信することを想定して、適切な選択肢を選ばせ、コミュニケーションにおける情報の発信力を測定できる問題とした。第5問は長文問題で、文章の流れに合う語彙を選んだり、内容について問うなど、長文読解力全般を測る問題としている。

【表1】

問題の種類	発音・ピンイン	語句	表現理解力	コミュニケーション力	長文読解
問題番号	第1問	第2問	第3問	第4問	第5問
解答数	9	8	10	12	11
配点	36点	32点	28点	52点	52点

第1問：発音の基礎及び正確さを確認する問題、正確なピンイン把握によるコミュニケーション力を確認する問題である。

音節の3つの要素（声母、韻母、声調）について問う出題及び正確なピンインの把握によ

るコミュニケーション力を問う出題となっている。中間AからDにわたって、日本の高等学校で初めて中国語を学ぶ生徒の語彙の習得範囲を考慮し、基本的な単語から出題した。高等学校教科担当教員（以下「教科担当教員」という。）からは、おおむね適切であるとの評価を得た。

Dについては昨年から出題形式を変更し、会話文をピンインで、選択肢を日本語で問う形とした。これは、従来この問題の識別力が著しく低かった点と、昨年度教科担当教員から「正答が容易に選べてしまうので、選択肢の文に工夫が欲しい」という意見を頂いたことを受けての変更である。

A：声母に関する知識を問うもので、**1**は舌面音“j”と“x”の区別や日本漢字音との対応非対応、**2**は中国語ネイティブが間違えやすい舌尖音“n”と“l”の区別を問うもので（中国にはこの区別のない方言が多い）、正確な発音の習得と知識が求められる。

B：韻母に関する知識を問うもので、**3**は“-ng”韻尾を有する各種の区別、**4**は“-uang”と“-ang”，“-uang”の区別を問うた。

C：声調に関する知識を問う問題で、二音節語及び三音節語における声調の組合せを問うており、三声の変調規則を含め全ての音節に関して正確に把握していなければ正解は導けない。中国語を学ぶ初学者にとっては習得に苦勞するポイントであると同時に、相当中国語に習熟した者でも正確な知識をままたくことがある。

D：ピンインの会話文によるコミュニケーション力を問う問題で、会話の流れを理解して解答する必要がある。

第2問：語彙力・表現力を測る問題である。

Aは文の一部をブランクとし、適切な語を選ばせる問題で、単語の意味・用法に対する正確な知識を問う問題である。併せて類義語の区別も問うた。**10**は正答率が低く、識別力が高かった。ただ、**11**、**12**共に正答率が高かった。

BはAと同様に、語の意味・用法に対する正確な知識を問う問題である。適当でないものを選ばせることで難易度を上げており、いずれも識別力を備えた問いになった。教科担当教員からは、選択肢がいずれも重要語であると評価されている。

Cは、100～140字程度の短文を読み、文脈に従って適切な語を選択させることによって、文脈に応じた語彙を選択する力を確認するものである。正答率は比較的高かったものの、成績下位の受験者層に一定の識別力を有する問題であったことが示された。教科担当教員からは、適切な問題であるとの評価を受けた。

第3問：作文能力及びコミュニケーション力を測る問題である。

和文中訳及び中文和訳を通して、中国語の表現力、理解力を測る問題である。設問形式は昨年度と同じである。

A：日本語の文を読み、与えられた語句を正しく並べて対応する中国語の文を作る、和文中訳の設問である。8つの選択肢から必要な4つを選ぶ。文法や語句の理解を確認する問題であるが、**18**、**19**、**22**、**23**は識別力のある問題となり、**20**、**21**は中位層と下位層に対する識別力が高かった。教科担当教員からは、選択肢の語句も重要語の範囲内であり、文法や語句の用法の理解を確認する問題として適切であるとの評価を得た。

B：和文中訳問題で、選択肢の中国語はピンインで表記してあり、日本語の日常的な表現に対応する中国語の運用能力を測ろうとするものである。問1、問2ともに日本語の表現を的確に理解した上で、ピンインで示された中国語の選択肢の全てを、それぞれ最後まで読み解かなければ正解が導けないように工夫した。問2**25**は、二つの節の接続関係の中国語での表現を考えねばならず、比較的識別力がある問題となった。教科担当教員からは、適

切設問であるとの評価を得た。

C：中文和訳で、問題文の中国語はピンインで表記してある。選択肢の日本語文を最後まで読み解かなければ正解できないように工夫した点は、上記Bと同様である。いずれも複雑な接続関係を適切に表現する必要がある、特に問2 [27] は比較的識別力がある問題となった。教科担当教員からは、適切な設問、良問との評価を得たが、問1 [26] については、反語表現に対する判断力を試す選択肢について、更なる工夫が必要であるという御指摘を得た。

第4問：高校生の日常生活、大学生のサークル活動など、実際のコミュニケーションの場を具体的に設定して、身近な話題に関する資料から、必要な情報を読み取り、複数の情報を比較・判断して要点をつかむ力を問う問題である。言語情報処理的観点から必要な内容を整理・統合して正しい解答を得るようにしている。中間Aでは情報を受信する場面における中国語運用能力、中間Bでは情報を発信する場面における中国語運用能力を問う。

現実の生活に即した素材からの出題であるため、従来出題には使われなかった語彙もこの第4問に限り取り入れている。ただし、受験者にとって難度が高い語彙は避け、正答を導くのに必要な情報は適切な語彙レベルを維持するよう配慮した。また、図表・グラフ・地図などを使って情報をスムーズに伝える工夫をしており、ここでそれらを用いるのは、そのような現実の生活の面における中国語の運用能力を問うことを主眼とするためである。

Aは世界の森林に関する大学生の会話、増減状況を示したグラフとその解説の文章から適切な情報を受信する能力を測る問題である。問1は、会話の内容を的確につかみ、その内容として適当なものを選ぶ問題である。問2は、数字を含むグラフと文章の内容を読み取り、どの地域のことを指しているかを選ぶ問題である。問3は、まとめの解説を読み取り、その内容として適当なものを選ぶ問題である。様々な形態の情報から必要な言語情報を抽出し、それらを処理した上で、適切な解答にたどり着く能力を測っている。問1、問3については、比較的識別力のある問題となった。教科担当教員からは、思考力を要する良問で、よく練られている問題であるとの評価を得た。

Bは、高校生が地元の森林公園のイベントに協力する場面で、会話や活動チラシ、イベントのタイムテーブルなどから適切な情報を受信した上で、それら情報を概括して発信する能力を測る問題である。問1は学生の会話の内容として適当な文を選ぶという問題である。問2は、大学内のイベントにおける活動の一つである「木工体験」における木工細工の作り方の説明文から作品の完成図を選ぶ問題である。教科担当教員からは、説明文から比較的完成図を推察しやすいという指摘があり、中国語の文字情報を多くするなど、更に工夫が必要である。問3は、イベントのタイムテーブルと参加した人の日記から、日記を書いた人がどの活動に参加したかを答える問題である。教科担当教員からは、正答を導き出すために、文章全体を把握した上でタイムテーブルと照合する必要がある、文章理解能力と数的処理が融合した良問であると評価された。

第5問：長文読解力を測ることを主たるねらいとしている。

今年度はエッセイから選んだ。長文の分量は、前回より少なめの800字強とした。第5問の得点率を見ると、他の大問と比べて低くなっており、一定の識別率を有する問題となったことが見受けられる。問題文は、使用語句、表現などにも留意しながら、共通テストにふさわしい内容に書き換えている。素材や書換えなどについても、教科担当教員から毎年提出されている要望を反映するよう努めている。

問題文は、著者が体育教員であった祖父のスポーツへの取り組みや周囲への接し方などから多くの学びを得たことを述べた文章である。問2と問7は、文中の空欄に入れるのに適当な

中国語の語句を選ぶものである。問5は、文中の空欄に入れるのに適当な中国語の文を選ぶものである。問1と問3は文中の下線部の理由を日本語の選択肢から選ぶ問題である。問4は副詞を入れる位置を選ぶ問題である。問6は空欄に入る複数の文を適切な配列に並べ替える問題である。問8は、文中の指示詞を指すものを日本語の選択肢から選ぶ問題である。問9は、この文章にタイトルを付ける問題であり、問10は、従来どおり、問題文全体の内容に合致する選択肢を選ぶ問題であった。

第5問全体を通しては、出題形式のバリエーションを増やしたことから、得点率が下がったが、問5と問7は、教科担当教員から比較的容易であり、選択肢に工夫がやや必要と思われるとの評価を得た。

3 ま と め

平均点は166.02点（200点満点）、100点満点換算で83.01点であり、最高点は200点、最低点は36点、標準偏差は30.18であった。昨年度、中国語が他の外国語と比べ平均点が高いということ、受験者の特性について議論になったが、受験者が昨年より約90名増加したのにもかかわらず、平均点がやや下がったことから、今回CEFRの新基準である媒介能力（母語と目標言語の対応能力）に重点を置いた作問や、出題形式のバリエーションを増やすことの有効性がある程度示される形となった。ただ、今後も日本語を母語とする学習者が高等学校の学習で到達した学力を正しく評価できる試験とすべきである点に変更はない。教科担当教員からも、高等学校からの学習者が対応できるような出題を強く要望されている。本部会の問題作成の方向性が平均点によって揺らぐことは、学習者にとって望ましくないが、引き続き、正答率の特に高い問題と低い問題をそれぞれ分析することによって、語彙レベルや文章題の難易度をそれほど大きく変えることなく、さらに母語話者が多いと考えられるという中国語受験者の特性に対応しつつ、高等学校における学習者が報われるような問題の作成を心がけていきたい。

令和7年度本試験の受験者は874人であった。本試験の受験者は昨年度の本試験の受験者781人から93人の増加となった。昨年の増加数を超えており、今後も受験数は増加していくことが予測される。来年度以降も、共通テストの目的に則して、基礎的な学力を身に付けた受験者が報われるような問題作成を心がけていきたい。

共通テスト5回目の結果として見た場合、シンプルな情報摂取、情報把握を問うだけにとどまらず、語学の本来の意義である読解力を問いつける必要性がうかがわれる。

今年度も教科担当教員の方々をはじめ各方面から有益な意見を頂いたことに、深く感謝したい。こうした意見を参考にしながら、「高等学校における学習の成果が総合的・客観的に判断できる問題」の作成を通じて中国語教育の発展と充実に寄与していく所存である。